

開館 10 周年記念展 第 2 部 歌麿と北斎 時代を作った浮世絵師

岡田美術館(箱根・小湧園) 23.06.11~12.10

浮世絵師「喜多川歌麿」と「葛飾北斎」は、ほぼ同時期に画壇にデビューをし、次々と新しいスタイルの作品を生み出し、大衆の心をつかんだ浮世絵界のスターである。先に「歌麿」が美人画で一躍人気を集め、一方の「北斎」は美人画にとどまらず、風俗画、風景画、花鳥画、武者絵など多彩な分野に挑戦して、90 年も長い人生に数えきれないほどの作品を残している。

本展では、同館が収蔵する「歌麿」3 件と「北斎」10 件の肉筆画(一点物の絵)を中心に、「北斎」の版画の代表作「**富嶽三十六景**」や春画の名品「**浪千鳥**」を一堂に展示している。

喜多川歌麿 《**深川の雪**》 江戸時代(1802~06 年頃)



現存する「歌麿」の肉筆画は、世界に約 40 点ともいわれる中、2012 年に発見された幻の大作「**深川の雪**」(展示 9.8~12.10)を含む 3 件を楽しむことのできる貴重な機会である。当時、繁栄した“手が届く岡場所の遊女とひと晩を過ごす”様子を描いた作品は、1948 年の展示後行方不明となっていたが 2012 年に発見された作品である。

2012 年に発見された作品である。

葛飾北斎 《**夏の朝鏡見美人図**》 1804~13 年頃 絹本着色 一幅



モデルは絵鏡をのぞきながら、背中をしなやかに反らせて、指先で髪を整えている。天井から吊り下げられた衣桁には、男物の着物が掛けられているのは、夫が起きる前に、身繕いをする若女房であろうか。

彼女の生白いうなじや腕がとてもなまめかしい。

水盤の金魚や水草が夏の風情で、床に置かれた柄鏡の蓋の上には、口をすすぐための茶碗があり、涼しげな朝顔の花と葉が浮かんでいる。

「日常風景の中に美を見いだす斬新なまなざし」が伺えて、夏の朝、鏡に向かって化粧をする立美人は、S 字形の体つきや鏡に映る顔の柔らかな表情がなまめかしく美しい作品である。